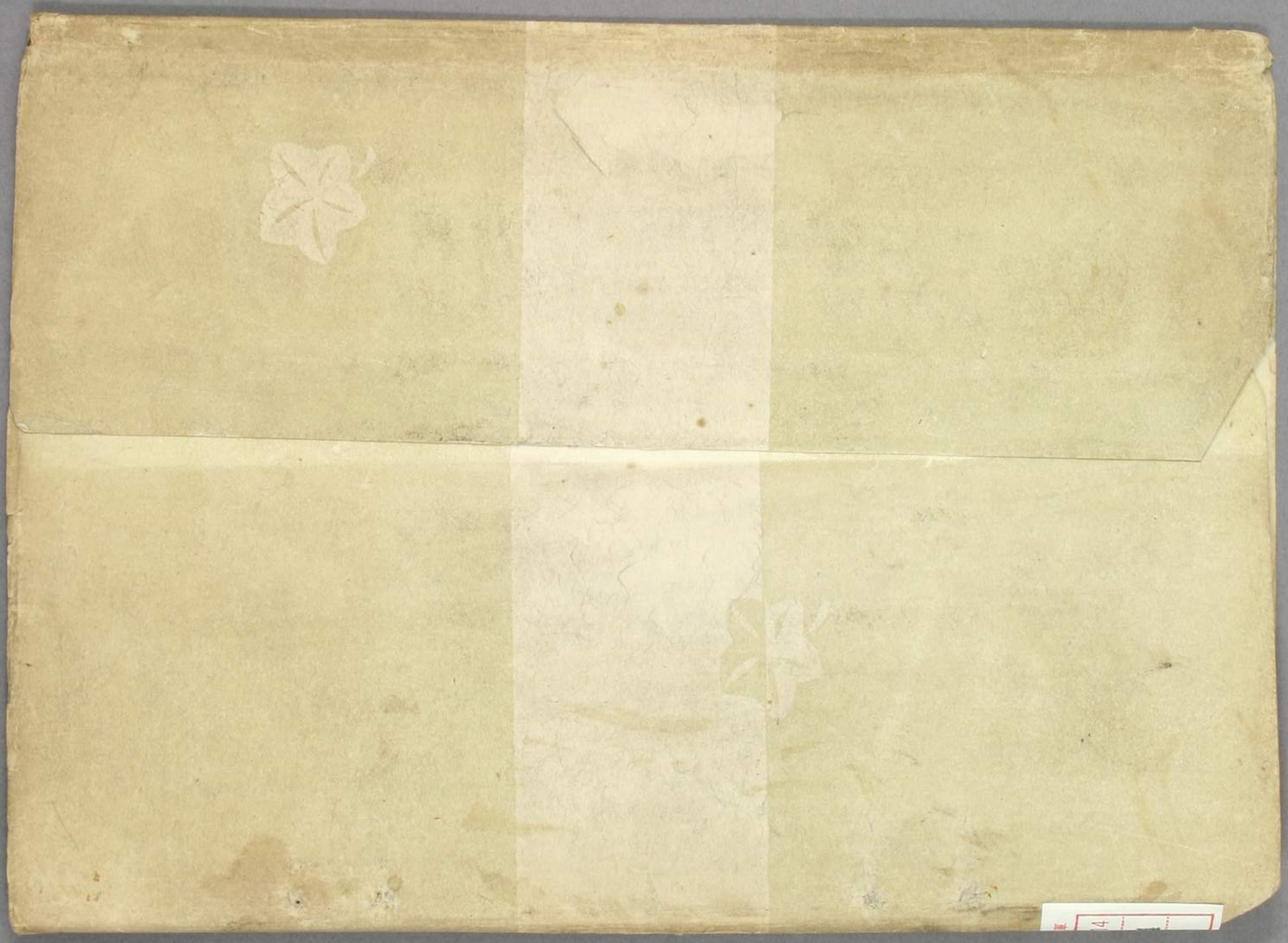
尾崎紅葉先生遺稿

病骨錄

文祿堂發兌

本間文庫
D 23

文庫
14
94



尾崎紅葉先生遺稿

病骨錄

全

文祿堂書店發兌

文庫14
D 294

謹啓

本書は卷頭に於る紅葉先生筆蹟の原稿より御讀み始め相成候やう希上候

病骨錄 發兌元 文祿堂

目次

病骨錄（自記）
同（門生筆記）
生死論
觀月

宗福寺小図書

病骨録

（其一）退院前夕日

（上）

三月十日

入院後三日ゝして相馬より来訪者の跡を絶つと云ふ事なりしが、此日の夕前より降つた雨霧もまだぐしゃ〳〵ゆゑ、子供心都合読書した。

夕食二膳であつた。鄙を煙りて、箸を執らんとする時、的進軍の[illegible]の[illegible]喇叭と

七、うら、上燭の出までよ入るから立暫ら
十二分が故蹴いぶ。曰く宮崎君、曰く文録君、
曰く堀江君、曰く田村君、曰く風巻生、曰く
春田君、曰く綾部生、曰く巻本生、曰く柳村
君、丈書、曰く岡田君、ぶよ入りて神山生。
見春の弟子、曰く蔦家支那古猪、曰く理久
せんべい、曰く味噌汁若、曰くエーフラア、曰く
鶏卵。
今朝の総重量四四一〇〇グラム（十一貫七百三
十目六匁）一時目ならず数名が喊ぶ頃ら

ず、[illegible]も[illegible]り、[illegible]も收り、又[illegible]る[illegible]元
[illegible]ようと、[illegible]て[illegible]に[illegible]ー、[illegible]く
[illegible]に[illegible]ーて、[illegible]も[illegible]て[illegible]
である。
此の[illegible]の[illegible]に、入[illegible]の四隅が[illegible]
が[illegible]ます。
最後によえるのが岡田[illegible]君、[illegible]が上田柳
村[illegible]で、自[illegible]に[illegible]の[illegible]を繋ら
[illegible]。[illegible]、[illegible]、[illegible]砕未[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]に[illegible]ーと[illegible]

つた。虚心君の遅れて還られた後、食前卅分に用る散薬を服して、直に晩餐の膳立を始めた。

先づミルク一合を沸煮して、少量の砂糖を投じ、之を茶碗に移して其の土鍋で玉子の半熟三箇を作る。是が出來ると、パンを截り、バタトオストを作るので、火の忙しいのも夥しいが、且飲み、且料り、且食ふのも、亦三面六臂の働である。

ミルクの煮え立つ折から、看護婦が來て、長澤氏の回診があると告げて、直に四下の狼籍を形附るので、予も食事を中止して待つほどに、學士は入來つた。胸部背部の打診聽診を了へ、更に患部を按ずること例の如くあつて、診後二三の閑話を交ふるを常とする其の口吻を以て、氏は此病に就いて如何に自身に考へて居るやと問はるゝ。此問たるや、實に今日の

午後風葉鏡花に向つて、予の說く所の者であつた。彼等は予の最も慣れざる病院生活の孤寂に堪へざるべきを思ひて。幾ど隔日に來訪ふ。予は其意を諒とするのではあるが、有樣を云へば、來訪者の頻繁に惱さるゝの際、寧ろ其煩に堪へぬのであつたから、予は決して無聊には苦まぬ。願くは、今少し靜思し、讀書し、散步する暇を欲するのであるから、明日か

らは決して見舞うてくれるには及ばぬ。勝手の時には呼ぶから、然したら何は措いても來てくれるやうに、と言渡したのであるが、要するに、彼等は予が平生の神經質を知るのであるから、孤寂の餘に病を案じ過して、如何ばかり憂悶して居るであらう、と其を察して、如此く慰問に來るのであつた。

（上）の二

予は憂悶すべきである。抑も此の痼疾は、始に輕ぜし如きものではなくつて、目下研究中のドクトルは未だ何等の診斷をも下さぬけれど、左に右にも、胃腑に或種の瘤腫を發し、又其の病勢が近來卒に增進の歩を取りつゝあるのは、今は疑ふべからざる事實

として、予の自らも認る所である。
胃の腫物！而も其の病勢の増進！誰か危み懼れざる者あらん。殊に其の平生事毎に杞憂を抱く人に在つては、必ず晝は愁ひ、夜は寢ねざるべきを思ひて、彼等は予の爲に慽々安ぜざる者あるのであらう。然るに如何なる故乎、予は入院後一たびも此事を念頭に懸けもせねば、夜は十時か十一時に寢て、一睡

直ちに天明に到るのである。予は固より此病の輕症ならざるは自覺して居たものゝ、又決して之が爲に斃るゝ事は無いと自信して居た。
が、萬々一にも斃れるやうな事が有つたら奈何か――それまで也、と單純に考へたばかりで、其以上には思及さぬのであつた。
去年の四月末に、此の幽門部の硬結を發見して、長與

ドクトルの診を請ひて、首を仄げられし後、予は幾度も此病に就いて懼れも戚ひもして、寢ぬ夜の思を累ねた事も有つた。其後病の少く怠つた爲に、高の知れたる胃壁の痙攣なんどに過ぎざるべきをと獨合點して、攝生も弛み、所に寒氣が來て、病勢の頓に增した爲に、入澤博士の再診を經て、病症を判定するの目的を以て、入院の勸告を受けて今日あるを致

したのである。

予は寧ろ其の重症に進みつゝある今日よりは、長與ドクトルの診察後に於て多く心を傷め、思をも勞したので、服藥、養生、節食、靜養、運動、曰く何、曰く何と、養生大不得意の予をして、命一つぐらゐの爲に恁くまで意思を拘束さるゝよりは、デキルの望むに任せて、この一命の如きは拋ち去らんと思ふ

迄に、殆と一年間苦められた。之が爲に予は自ら病苦に慣れ、病感に慣れ、病愁に慣れたのである。

如此く予は半信半疑の間に、稍一ヶ年間懸けられて居たのである。此の「長く慣さるゝ」と云ふ事が無かつたならば、予の此度の憂悶は、其の憂悶のみにして一夜一千グラムの體重を削るも易からうと思ふ。幸に些の憂悶も無かりし爲に、單に消化不良に苦むに

止つて居たのは、予の此上無き幸として、深く喜ぶ所である。

長澤氏に答ふるにも此の事を以てした。氏は又予の爲に頗る之を慶ばれた。

知らず、氏は何の要有つて今此事を問はるゝのであらう。止例の閑話に過ぎぬのである乎。予は無論然うと考へた。

（上）の三

然るに、長澤氏は體度を改めて、此の病症の宣告が如何に與へらるゝ乎は、未だ試驗中の事ゆゑ知り難いが、若し其が悲むべき者であると爲るならば、足下の豫期せらるゝ處置は如何にとの質問。

萬一手術を要するとならば、（要せざれば論無し）一先

退院して、空氣の清く、境の幽靜なる邊に轉地して、爲し得る限り保攝療養して、とにもかくにも暫く病と鬪つて、愈よ破るゝと見て後、更に痛處に一刀を請はんの覺悟と答へた。

人は女々しくも、姑息にも思うであらうが、予は一家六口の主宰者であつて、予が命は予が命にして、而も予が命にあらず。若し手術効を奏せずして、そ

のまゝ殪るゝならば、予の殪るゝにあらずして、予が妻と四人の子と老祖父と、猶算し來らば、兩三の併せて殪るゝ者有るのである。此等の事實上予に殉せざるべからざる者に一言の詢るなくして、自ら殪れ、彼等を殪すは、情として忍びざる所。又自とても決して惜からぬ命にもあらねば、さすがに腹を剖くの危きを思へば、餘命を存して、天佑を徼幸する

の苟も安きに就かんことを冀ふのであつた。此故に予の決心は一たび病と鬪はんと云ふのである。なれども、醫師としての長澤氏は、予に同情を表せぬのであつた。否、寧ろ予が目前的分別を懌ばぬらしい氣色で、

言はるゝ所は尤であるが、それは畢竟兒女の情で、捨置けば病勢は募るばかり　今現に進みつゝあるの

は、足下も能く自ら認められて居る――で、募り募つた結果は殪るゝより外は無い。然らば、十分とは行がぬ迄も、七八分の活路ある手術を試みられぬと云ふ法は無い。重大の手術であるから、萬全を期する譯には行かぬ、或は不結果の爲に死期を速めらるゝ虞は無いと限らぬ。故に死を賭して手術臺に上る覺悟は持たれたい。けれども、空然として死の到るを

待の愚に勝ることは幾等であらう。

醫術の進歩した今日ではあり、又いざと云ふ日には、十分精査の上、出來る限り愼重に施術するのであるから、不時の殃はとにかく、人爲としては、一の失措無く盡すのである。此の神聖なる刀の前に、覺悟と信頼とを以て横るの御決心は有りたい。足下の爲に計るに之より道は無いのである。

然し、未だ其と斷定された運命でもなし、殊に病氣に就て此度多感的でないといふ事は、實に可喜しい事で。目下の急務は、體力保養の一點である。施術するにしても、第一に體力の强からんことを欲するのであれば、どの道攝生して營養を盛にする心要が有る。近來食氣の有ると云ふは、何より重疊であれば、出來るだけ滋養を取らるゝやうに努められたい。

肉類も然う不消化では困るが、消化し能ふ限は用ゐらるゝが宜い。葡萄酒の薄いのなども、少許は用らるべし。どうぞお大事に、と氏はアヂュッを告げて去つた。

時は八時半過る頃。予は直ちに火鉢の前に坐つて、彼の半熟を作らんと、火を吹いた。

（下）

噫、予は死の宣告を受けたのではあるまい乎！

切開を避れば、病の爲に早晩斃れねばあらぬ。進んで手術臺上に身を置けば、命を賭さねばあらぬのである。氏は病名を告げず、猶試驗中であると言はれたが、予の胃部の隆起は、切開乃至切除を要すべき一種の腫物たるや疑無い。それは何等の疼痛をも感ぜず、唯消化障碍を作すのみである爲に、自身は然して重くも考へて居らぬけれども、其實決して輕からぬ者なのであらう。

此の病に就ては、其の平生に似ず多感的でないと揚言した一分時間の後の予は、今其の胸裏に波の涌く

が如き多感を禁ぜざるのである。

予は茫然として、冷めて味の無い一合のミルクを啜つた。啜りつゝ思に沈むのであつた。土鍋の湯は沸いて、四箇の雞子を投じたのは覺えて居たが、何分を經たか記臆するのを忘れた。四分間を適度とするのであるが、五分以上を經たと思はるゝので、蓋を切つて見ると、湯は沸騰して居らぬので、又少く措

いて、取出した。

殼を裂いて見れば、蛋白は人肌の如く固つて、蛋黄は金柑のやうに成つて了つて居る。再び作る力も拔けて、其の柔かさうな處を抉り食つて、大半は棄てて了つた。

三片のパンはバタトオストにする積で、バタを布いては炙り、炙つては布きするのであるが、大方は

是も焦して了つた。

食氣の有るにも關らず、劣い〳〵晩餐を了へたのは、九時少し前。看護婦は入つて來て、予を慰めんと爲た。

倘し是が予の平生を識れる者であつたら、孤燈の下に悄然と獨り坐して、冷きミルクと三片のパンとの前に死の宣告を受けたる己の、如何に慘たる者の極

なるかを思ひて、一掬の涙を灑がずんば止むまい。

予は左にも右にも決心を爲ねば成らぬのである。其の決心を得んが爲に、予は燈下に首を俛れて居る。若し一たび決心せん乎、人は又相應の勇氣を得るのである。

予は今決心に迷ふのである。此の瞬間の如く人の「弱き」時は有るまい。白壁に映へる影も、必ず薄く微に、

憐むべき者であつたらう。看護婦は忙々しく膳の取散せるを片附けて、出て行つた。

予は何の言を以て之を家人に告げん！

予は旋て覺束なくも決心を得た。

此の決心は、或は家人の決心、又は友人の勸告の爲に移さるゝ事が有る乎知れぬが、予が今の決心なる決心を得た。而して始て魂の搖ぐを止め得るのであ

つた。如此にして、死の宣告を受けざる前の安靜なる神氣に回るを得たのである。

然るに、今夜を如何にして過さん乎の疑問は、直に腦を衝いて起つた。死の宣告を受けたる其夜！多感ならざる人も決して眠り得ざるべき其夜を！

"The night, oh, night is a weariness to me! All lie down to sleep,
I too lie down, it is well with all of them, but I lie as in my grave."

予が胸は卒に轟いた。

予は時として、或事に就いて甚しい杞憂を抱く癖が有つて、其が爲に寐ぬ夜が幾許も有る。予が三盃上戸にも關らず、ウヰスキーを飲み、ブランディを飲み、其他の烈酒を銜んで、日本酒家を驚かせし習慣は、蓋し其夜を眠らん爲に養ひ得たので、又其が爲に甚しく胃を害しも爲たのである。

予は件の決心の力を以て、今夜は寐なんと思はざる

にあらねど、又有繋に不安の念は一面に鼓動して、已まぬ、醫の許したを幸に、今夜は葡萄酒の醉を藉る必要有りと信じたので、折から寒からず、朧めかしき薄月を窓より望みて、散歩がてら本郷通迄それを買ひに行かんと、忽ち起つてドアの外に出た。

看護婦に斷り置くべきであるが、そこらに見當らぬので、直に歸るものと玄關を出た。

花時はいかばかり麗しからんと思遣らるゝ櫻林の、高き梢の上に方つて、薄雲に掠めらるゝ月影を仰ぎながら、やゝ春めかしい夜風に吹れて、雪駄ちやらちやらと出た時は、孤燈の下の愁思は忽ち銷して、一句有りたいなどゝ暢氣に搆内の運動場側まで來ると、後から人の追來たる氣勢がしたと思ふと、何やら聲を掛けた。

わが事かと見返れば、白衣の影の走り來るのである。

「尾崎さん、あなた那裏へ被入るので御座います。」

櫻井看護婦は息を切つて近いた。

「いや、貴方でしたか、葡萄酒を買ひに。」

「あゝ、そんなら宜うございますが、又貴方那裏へか被入しつて了つて、今夜お歸りが無いのではないかと思ひまして。」

彼は死の宣告を受けたりし予の、何地にか其死を追れんとするにあらずやとの疑を以て、予を追ひ來たのであるらしい。

天下何處にか斯死を追れん！

「直に歸りますよ。」

「十時の門限で御座いますから、それまでには。」

「買物すれば直に歸るのです。」

「はあ、そんなら行つていらつしやいまし。」

又索々と、薄月の下に白衣の裾を飜して引返した。

元富士町の門を出る頃、小腹に微痛を感じたが、堪へかぬる底の者ではなかつた。郵便局に入つて、然る方に病況を報ずる一通を投じた。

此狀は今日の午前に認めた者で、中に記す所は、病症の決して憂ふるに足らざるのであるから、數日の

後には一先退院して、其後轉地療養をすると云ふのである。今と成つては僞の言分であるが、今日の午前には實に其通りに信じて居たのである。それが出し後れて居た爲に、如此き虛僞の報知をせねばならぬ事に成つた。實は其も快からぬゆゑ、書改めやうとも思つたけれど、此身を案ずる方に不祥の事を聞かせるのも氣の毒なり、一日なりと安慰を與ふるが

其の好意に對する報酬とも考へたので、颯と投じて去つた。

本郷の四辻に出て、右へ曲つて、青木堂の店に入つた。サンテステフと云ふのを擇んで、其の一瓶を買つて、直に出た。

小腹は仍微痛を續けて居るのである。古本の床店の前に立つて晌すと、素丸の句集が寫本で出て居た。

買つて見やうかとも思つたが、讀む書物は有るものをと、立去らんとして見ると、予より先た居た大學生が洞房語園の直を附けて居た。

警察署を曲ると、捲起る風にやゝ寒さを感じた。空も往よりは曇つて、灰色に成つた處々に黑い斷雲が出て、月を蔽つて了つた。恰も是Grey hopelessness covers my sky.

玄關の燈は黯淡として見え初めた。死の門！はや九時半も過ぎつらん、窓々のカアテンは皆垂れて、病室の燈火は外を照す力も無い。其の寂しい木の下路を過ぎて、予は死の門を入つた。一直線の長廊下を照すラムプは黯く點つて、雜使婦と看護婦との疲れつゝ往來ふ影が、其の薄くらがりを破つて動くのであつた、尤も明かなるは予の病室で、內に人の居る

が如く火點りたる九號室！予は尤も燈の細きを忌むのであるから、眩きばかり常に點火する習である。病室の燈暗きに堪へらるゝものであらうか。予は纔に此の明なる燈火に邀へられて、戸のノッブを捻つた。室内の溫氣は氤氳として面を撲つた。枕上のチャブ臺に置いた菫の鉢に、看護婦が彼の剪綵花を挿したのが、眞の花と見紛ふやうに、其が先づ目に入

つた。

予を雪駄の音に知れる看護婦は、二箇のメエトルグラスを携へて、今宵寢前の尿と明朝睡起のとを試驗用にと要求した。彼が先に予を追ひしは、此事の有る爲であつた。

葡萄酒のコルクを拔かしめて、予は日記に着筆した。而して十一時を過る迄、殆ど手をも休めず今夜の顚

末を書いたのである。

己が己の事を書きながら、此の筆の走る間は、予は全く愁を忘れて居た。

未だ睡氣は來らざれども、倦みたる爲に筆を止めて睡を試みんとして、まづ二盃の赤酒を擧げた。盃に觸れざるのは幾日であつたらう。三千里外故人に逢へらんやうの想がした。三盃も四盃も五盃も吃し得

らるやうに覺えたが、祟を恐れて二盃にして罷めた。同時に輕い醉が催して、何となく愉快を感ずるのである。

ベットに上つたのは十一時半過。睡は待設けたやうには來ぬのである。良有つて看護婦は入つて來て。何も用は無いかと聞く。

彼等は十時に退くのが規定である。予の覺めて居る

爲に退かで居たのであらうか。バケツトに水を求めた。何に爲るかと問。醉うた故に頭を冷すと答へた、が、有樣は、寐られぬ故に冷すのであつた。

彼の愉快なる微醉は睡を呼ばずして、甚しく興奮を來した。其が幸にも愉快に興奮されたので、無論省の宣告に就ての空想を逞くするのではあつたが、其の空想が徹頭徹尾悲觀的の者ではなくて、予は如何

にして予の死を最も快く迎へん乎と計るのであつた。水を求めし看護婦は氷囊を賚して、白布に裏んだのを鉢卷させて、辷り出た。それさへうろ覺であつたくらゐ、予は其の空想に耽つて居た。

頭は冷されたけれども、興奮はなか〳〵息むのではない。

予は實に爰に書列ぬるのを憚るほど、愚しい事にま

で想到して、幾と聲を放たぬばかりに獨笑した。予は疑うた。自分は心痛の餘に發狂したのではあるまいかと、然らざれば、此の危急の――人間の最大事たる死に面せざるべからざる如き場合に、人として決して如此く暢氣に在り得べきものではない。泣くべきに予は今笑ひ、愁ふべきに予は今勇むのである。彼の笑ふ怯者と泣ける勇士といふ語を想うた。予は

狂者にあらざれば彼の怯者なる者乎。

予は確に自身の知覺を失うて居らぬのを認めた。然らば、怯者であるのであらう、恐くは其の儔であう。予の此の場合に於て、如此く樂むが如き空想を抱く事の餘りに非人間的なるを想ふのである。自ら然う思ふほどに樂み且勇むのであつた。

怯者の幸なる哉。予は此夕如此く怯者たりし幸を祝

して已まぬのである。

十二時過に夜番の看護婦が來て、予の氷嚢を撫して、一時過に再び來て氷を易ふべき旨を告げて去らんとして、ラムプの餘に明かなるを見て心を引入れんとした。予は多く引入れぬやうに注意した。

一時過に彼は來たのであらう。全く覺えなかつた。

二時といふ頃に慾い氷嚢をかなぐり捨てゝ、起回つ

て喫煙した。三時、四時前まで夢とも現とも無く前の空想を續けて、而も何等の心を傷ましむる事も無く、寧ろ樂しく、死の前に爲すべき事を一々設計して、其の企圖の通り事々に成効するのを空想して、死の宣告に酬ゆるほどの他の滿足を得つゝ、眈むともなく睡り去つた。

六時！看護婦は牀側に近いて、例の體溫器を予に差

出した。予は爲に目覺めたが、脈搏、呼吸、體溫を檢する後、予は平生の如く何等の思ふ所も無く、春眠の蹙らざるを再び貪りて、又うつら〳〵と無何有の鄕に入るのであつた。

看護婦は室内を掃徐する氣勢、と思ひつゝ漸く目覺むれば、はや人も居ず、時計を取つて見れば七時を過ぎた。

室の眞中には、バケツトに水を湛へて、予が朝々の冷水摩浴の支度は出來て居る。

又長く煙を噴いて白壁に映ずる春日の澹蕩たるを打矚りつゝ、予は全く好睡を得て、夜前の愁無き人に覺めたのである。

越えて三日、十四日の午前九時半、入澤博士は自ら來つて、其の斷症試驗の結果を告げ、而して去るに

臨んで、

「私の誤診であることを希望するのです。」

（一）

今日は十月の朔日、余が命數は其の六月一杯さ謂ふ噂が起つてから、七八人さ三箇月半近びたのである。で、此の六月一杯の亂說は

大學の主治醫が言出したとも言ふし、又は同人間から言出したとも言ふ。予は自ら因つて來たる所以を知らぬけれど、左に右五月か六月かと謂ふ噂が一時起つた。其を聞いて予は意外の感に打たれた。固より此の病氣が難療不治の重患である事は知つて居たけれど、其噂の起つた三四月頃の容體と謂ふものは、平生と差したる相違無く、唯甚しく消化不良

の爲に惱んで居つたけれど、患部の腫脹が忍び難い疼痛を發するでもなく、其他胃患者の例と爲る所の、食物を吐すとか、下痢を起すとかは全で無かつたので、忽ち劇變して然謂ふ容體に陷るならば知らず、當時の有樣は一日々々に惡くならうとも、五月や六月迄の短日月に、予が命數の膏の盡きると謂ふ事は、如何にも豫想されなかつた。で、予が三月の三日、

始めて入澤内科の病室に入つた時、受持の看護婦が一同の顏を眴して、患者さんは誰方樣ですか、と聞いたくらゐな始末で、其から二週間の後、退院する時も容體には何等の變りも無く、猶且誰方が患者さんですかと言はれしやうな有樣であつたから、其の翌月、又は翌々月中に、此の病氣の爲に殪されるなどゝ想ひも寄らんのは、卑怯でも無く、未練でも無

く、蓋し誰に在つても至當の事であらう。

皈宅して療養中は、然らぬだに年々健康を損ずる梅雨の時節で、而も今年の梅雨は隨分惡摯いものであつたけれども、幸に然したる損害も蒙らず、病院に居た當時と比較すれば、幾分か患部の惱みも劇しく、又從つて消化障礙を起した爲、惱みには惱んだけれど、豫て聞く所の胃癌と謂ふものとしては、其の苦

惱たるや實に些々たるもので、此の有樣なれば少し療養を專にしたらば、此病に打勝つ事は決して難からずと信じて、窃に喜んで居たのである。

（二）

然るに七月の六日、恰も淫霖の旺なるが三日續に降暮らした其の最後の夕、時は夜の九時頃に突然胃の大彎部と、横行結腸の邊との二箇所に、今迄決して無かつた劇痛を發して、全く其が爲に寐るに寐られず、起るに起られず、夜具布團を枕頭に積重ねて、

其に梯子を立掛けたやうに寄掛かつて一夜を明した。其の翌朝も疼痛は依然として去らなかつた爲に、遂に醫師を呼んで手當をしたら、三日目には稍輕快に赴いて、幾分か凌ぎよくなる事を得た。けれども此が予の枕に就く抑も發端で、其以來今日まで、床は敷詰になる、床擦は出來る、藁布團を敷く、羽布團が無ければならぬ。其から枕が奈何の、

毛布が奈何のと言草を言はなければならぬやうな身の上に成つて、此の七、八、九の三月間と云ふものは、實に半生壯健なりし予が、全く知らざりし種々の病苦を嘗盡したと謂つて可い程な難義を究めた。

で、此の三月は滋養を取る事が不十分だから、體力は日々に衰へ、病勢は日々に增し、彼の大彎部の疼痛は絶えず惱まして、八月の始頃からは、枕上の讀

書も出來ず、徒書を爲る勇氣も無く、其が次第に嵩じて、後には葉書一枚書く事も出來無くなつた。（今日でも先づ其の有樣）

恁謂ふ次第であるから、此の三月間の病床の生活は、一點の生きたる念のあるでなく、幾ど半死半生の裡に日夜を送つて、苦しき活を求めんが爲に、常に死と鬪つて、其も一歩一歩に斬込まれるやうな有樣で

ある。

或時三日三晩打續けて、患部は疼む、滋養は取れず、其を強て物を食べると、腸胃が膨滿する其苦しみ、是に膏汗を流して是を耐へる時の如きは、寧ろ死の遙に優れるを覺えて、何故に予は自殺せざる乎、と思つたくらゐであつて見れば、彼の風説に過ぎざりし、予が命數の六月に盡きると云ふ語は、蓋し的中

せるものであつたとも考へられる。

即ち七月から今日までの三月間は、決して生存して居るのではなくて、死損なつて居ると謂ふのが至當である。

（三）

子規隨筆でも仰臥三年でも、皆モルヒネの効能を說いて居る事であるが、實に天下に於てモルヒネの如き結構なものは無いと謂ふ事を、予は這回の病氣に於て實驗した。

大彎部に三日間疼痛を覺えた時には、予はモルヒネ

の味を知らなかつた。又服用をする事にも氣が着かなかつたのに、醫師が來て、右樣の苦痛を徒に忍ぶよりは、縱ば中毒の怖ありとも、然う濫に中てられるものではないのだから、適宜の量を取つて、苦痛を去るが宜しい。其處で始めて此を試みたのは、八月の末の事であつたが、忍難い苦痛に冐された時、

○、○○六といふ量を始めて試みた。十分と經たぬ

中に効驗は忽ち現れて、今迄激しかつた疼痛は忽ち除き去つて洗ふが如く、加ふるに鈍つて居た頭腦は、忽ち冷水を以て注がれたる如く、病氣は爽快に、平生と雖も例無き愉快を感じて、四肢は何となく、甘き嬾さとも謂ふべき一種の醉へるが如き痲痺を覺えて、其の精神的に、且肉體的に、美妙なる醉心地を覺える愉快は、實に言語の盡すべきでない。實に恁

の如きの靈驗有つてこそ始めて藥とも云ふべきである。其時の嬉しさ、悅ばしさは、病中に於て例の無いばかりでなく、健康の時に於ても、未だ嘗て遭遇した事は無かつた。

翌日醫者に此事を告げて、大に悅んだ所が、お說の通りモルヒネなるものは、實に藥中の藥で、若し此が無かつたならば、醫者は日干に成つて了ふのです。と答へた。

（四）

此味を覺えてから、當時醫者にも忠告を受けた事であるが、痛が催すと服みたくなる。服めば服む程量を增さなければ、利かなくなるのが此藥の常。其を毎も同じに利くやうに服まうと爲るには、勢ひ漸次分量を增さなければならぬ。其の結果は奈何かと謂

へば、即ち恐るべき中毒である。からして然う濫に服む事はならぬ。と切に止められた。

けれども痛の來る度に、先の愉快を思出せば、決して服まずには居られぬ。此の當座の苦痛を忘るゝ事が出來るならば、中毒何かあらん。死も亦何かあらん。と謂ふほど此に焦れて遂に服用する。然し今度は、前と同じ分量では、先の愉快は取られぬ。が、

相當に苦を拔き、樂を得る事は出來る。其が三回以上に成ると、幾ど靈驗を失つて了つて、分量を增さなければならぬ。其が爲に八ミリとなり、遂に一サンチとなる。もう此上に增量爲る事は宜しくない。と制せられた時の心細さ。

後に其の一サンチを試みた時も、決して先の始めて六ミリを試みた時の愉快の、漸う半よりは得られぬ

のであつた。のみならず時としては、疼痛の鎭らぬ事さへある。で、此を醫者に訴へると、慣れては皆然うであるから、寧ろ代用藥を用るが宜からう。と言ふので、「ヘロリン」と云ふのを薦められ、後又「ヂオニン」と云ふのを薦められた。又此他にも二三の代用藥が有るさうだが、其の實驗爲たのは右の如く、「ヘロリン」「ヂオニン」の二藥であるが、此をモルヒヲに比

ぶれば、其の効力は月前の灯とも云ふべきもので、幾ど似て非なるものと謂つて宜しい。

若し此のモルヒネなるものが、アルコオルの如き緩和なる中毒性のものなれば、予は今日よりモルヒネに隱れて、世間の患を忘れやうと思ふ。

實に吾をして身後の名有らしめんよりは、病中一服のモルヒネに若ずである。けれども此味は、酒を飲

まぬ者に、酒中無天子の消息を說くよりは、未だ未だ盡し難い。嗚呼、モルヒネなる哉。

（五）

予は常に人に語つて、恐らくは胃癌で命を果すであらう。と言つて居つた。けれども予の希ひは、長病ではなくて、彼の手取早い頓死、或は湯の裡でも、或は膳の前でも死を期せずして死する事は、予の死に於ける希望であつた。が、不幸にして、胃癌の爲

に殪れるであらうと謂ふ事は、偶然ながら常に恐る
る所であつたが、果せる哉、今日の病に得た。
然しながら這病たるや、尠くとも四十五六、乃至六
十と云ふ頃に至つて發するのが例でかつて、予の如
き年齢で這病に罹ると謂ふ事は、統計上異數である。
けれども決して例が無いのでない。前年入澤博士の
手懸けた患者の中に、さる地方の少年で、年僅に十

八歳にして、髓樣癌の甚しいのに罹つて殪れたのもある。其他近年歐羅巴諸國に於ても、四十以下の患者比々として現れるが、此は病氣に成つて始めて知つた所で、胃癌で殪れた所が六十くらゐまでは奈何にか保たう。といふ意であつた。

凡そ人間の事業は、四十以上にして始めて成るので、其以前の物は先づ皮毛に屬する。と予は考へる。

予も今迄文章を學び、奈何にか一通には書けるやうに成つたと考へるから、今後ますゝ精勵して、廣く世間の活書を讀み、思想を蘊蓄して、五十六十の此の二十年間に、尠くとも二三の得意の書を著して、其中一册は烏滸がましくも、後世に遺るべきものを、との希望であつた。

（六）

何時の年であつたか、紅葉館で、博文館の催にかゝる宴會があつた。丁度多情多恨が出版に爲つた當時で、予は少し遲れて出席した時に、大勢の中から、依田先生が現れて、先づ予の手を捉り、多情多恨は寔に面白く讀まれた。君の文章はます〳〵上る。と

極りの惡いほど賞讃された。

其時に予は先生に答へて言ふには、那等を御賞美に預つては實に汗顏の至で、自分の豫期する所は、四十以後の作に有るので、今書いた物の幾ど乳臭を脫しない事は、自身にも克く認めて居ります。奈何か見て下さるならば、今後の作に願ひたい。と、恁言つた所が、先生は極く眞面目で、はゝあ、其は殘念

だが、僕は其作を見る迄の壽命が無い、這話は今も予の記臆する所て、這病に罹つてからは、一層其の四十以後を思ふて已まぬ。或は生延びて恥の多い劣作を出すやら解らぬけれども、其點に就いて、予は死ぬる事を最も遺憾に思ふのである。

七十三の依田先生は、今猶矍鑠として、三十七の已は病床に殘喘を保つて居る。最早今生では其望も愜

はぬ事であるから、凡ての妄念を一洗して、唯予は臨終の際に於て、七度人間に生れて、予が思ふ程の文章を書かうと爲るのである。

（七）

ナポレオンが胃癌で殪れたと云ふ話から、日本の武將でも上杉謙信が、依樣這病に罹つたと云ふ話を爲た人がある。

何の書に出て居るか其人も覲えぬけれど、脇噎に罹つたものらしい。其で越後の春日山の城中で、毎日

金頭の燒肴を食つては、槍を使つて居たと云ふ。

金頭とは妙な物を謙信は好んだものだ。といふ事を一客に話せし所が、其人は高田、直江津地方に長く居て、其地の樣子が明るい。言ふには、其は何も謙信が格別金頭を嗜好したと云ふ譯ではないのである。彼の地方は金頭の名物であつて、然も那魚に限つて腸が甘いと云ふので。腹を裂かずに其儘串刺にして

こんがりと燒いたのを賞美する。金頭の旬になると、料理屋でも其を薦めるくらゐ。些とほろ苦くて、變つた風味が有る。然して胃に宜しいと傳へられる。恐くは謙信も胃の藥と云ふ所から、金頭を食つて、運動に槍を使つたのであらう。

左に右那の武將が、脇噎と云ふ重患に陷り、金頭を食つて槍を使つたと謂ふ所が、如何にも面白いではないか。

（八）

見舞の客も大勢ある。然して其等の人は皆、予が病の不治たるを知らぬは無い。けれども有繋に遠慮して、予が死を口に爲る者は一箇も無い。が、其中に唯一箇、繁々見舞に來、又顏さへ見れば死を言ふ男が一箇あつた。

元より覺悟の上ではあるものゝ、然うむくつけに今にも死ぬやうな事を言はれるのは、病人に取つては甚だ快くない話で、然も其客は遠慮の無いと言ふよりは稍芋の煮えたも御存じない方の性であるから、自分は有繋に小癪に障つて、僕は決して此位の病に命を奪はれるのでないと言へば、彼直ちに言を返して、自ら死なぬと言ふ病人は助からぬと申します。

などゝ、極めて可厭がらせを言ふ。予の言ふには、今日あつて明日を知らぬ人の命の事であるから、頑健鐵の如き者と雖、明日の命は受合ふ事は出來ぬ。又此の難療不治の病を抱いて居るからは、元より死ぬものと覺悟を極めて居なければならぬのである。然しながら君が言ふ如く、予は必ず此が爲に死ぬものと爲れば、何を目的に此の苦しい思を忍んで、効

の無い日を送るのであらう。自分は日夜苦しみ、家内には迷惑を懸け、無用の財を費し、實に天下の穀潰のやうである。其で揚句は死と云ふ事ならば、一日も早く、死ぬが優であつて、苦しい生を貪る所以を知らぬのではないか。然るに自分に限らず、必ず助からんと謂ふ凡ての大患者が、皆苦しい思を忍びつゝ、一縷の生命を繋いで居るのは、心窃に萬一を

僥倖して居るのである。此が人間の弱點であつて、其苦しい一日々々が生きて居たいのではなくて、恁して居る中には、月の再び圓かなる日がある如く、健康體に復す時も來やうと謂ふ、儚い望を懸けて居るので、若し然もなければ、誰か生効の無い命を細細と保つて、日夜の苦痛を忍ぶものぞ、皆手短く自殺を爲るに違ない。であるから、命は惜くないの、

死は怖れぬの、覺悟は爲て居るのと、口では立派に言ふものゝ、此の萬一の僥倖を希はぬ病人は一人も無いのである。

予も死ぬをば極めて居るものゝ、或は助かるものと信じて居る。然もなければ既に二三箇月以前に、ピストルを額に當てゝ、今頃は青山の墓地でお目に懸かつて居るのだ。

牛門の秀才田中涼葉氏　病て師紅葉山人の家を辭し　郷里金澤に歸つて病蓐尚筆硯を擲たず　喀血紙を染むるもの三度にして　初めて脱稿したるは　即『仇浪』なり。　仇浪の成るや、氏遙かに師に呈して斧正を乞ふ　師一閲驚て云く　彼が詩想の進境何ぞ爾く急なるや　直ちに筆を加へて添削最も意を致す　而して　仇浪の前半世に出る日　涼葉子の訃は　師の許に到る、嗚呼　仇浪の一篇は　實に此の如き　慘澹悲愴の歴史を以て生れたるなり。卷末には　同門の秋聲氏が　滿腔の同情を寄せたる跋文あり　又　風葉氏の『院長』　春葉氏の『白堇』鏡花氏の『月下園』　いづれも亡友の遺稿を飾るが爲めに　各得意の筆を着けたり、　殊に主眼なる仇浪の一篇は然く紅葉山人の青朱

濱の屋の裏木戸を出れば、そこは船形から館山まで打續く海岸、約二里が間は荒寥たる野を成して、瘦麥の畑やら、短い葉末の始から黄んだやうな稲田の中に、處々に散在てゐる磯馴松が蔚然と黑く見える宵闇の空には、金砂子を撒いたやうに星が輝いて居る。

渚の方に人影が組んづ釋れつして居るのであつたが、今や一人は下に組敷れて、其に踏跨つたのが、振揚げた手を下すと齊しくさやつといふ叫聲は、直に潮風に攫れて了つた、立起つた人影は傴々と波打際に寄つて、猶も海中へ進入つたが、潮は彼の腰を沒して、折からの一波が高く胸元まで打揚げると共に、其姿は再び見えずなつた。其迹は名にし負ふ鏡が浦の波穏に、眞黑く布き亘し

濱の屋の裏木戸を出れば、そこは船形から舘山まで打續く海岸、約二里が間は荒寥たる野を成して、瘦麥の畑やら、短い葉末の始から黄んだやうな稻田の中に、處々に散在てゐる磯馴松が蔚然と黒く見える宵闇の空には、金砂子を撒いたやうに星が輝いて居る。

渚の方に人影が組んづ釋れつして居るのであつたが、今や一人は下に組敷れて、其に踏跨つたのが、振揚げた手を下すと齊しくきやつといふ叫聲は、直に潮風に攫れて了つた、立起つた人影は從々と波打際に寄つて、猶も海中へ進入つたが、潮は彼の腰を沒して、折からの一波が高く胸元まで打揚げると共に、其姿は再び見えずなつた。其迹は名にし負ふ鏡が浦の波穏に、眞黒く布き亘したる海面は今人を呑んだ景色も無く暗然と眠るが如くである。

故尾崎紅葉先生著 **あだ浪**の一節 定價郵税共全一冊六十錢 にて賞需に應ずべし

發兌元 東京市日本橋區東中通 ○電話本局八十八番 **文祿堂書店**

全國至る所の書林にて賣捌申候

を施したるものなれば　着想の奇警　文章の老熟　驚くべきものあり　今や文祿堂　此書を梓行するに方り　從來の小說刊行には殆ど　其類を見ざる程の美裝を凝らし　用紙印刷共に精美を極めたるは　亦文界の一美事と云ふべし　云々

（中央新聞評）

生死論

死は憎むべき者なる乎。

若し生を以て愛すべく、戀ふべき者なりとせば、死は良に憎み且厭ふべき者なるや明也。

然れども生や果して愛すべき者なる乎。

に歸つて病蓐尚筆硯を擲たず　咯血紙を染むるもの三度にして
初めて脫稿したるは　即『仇浪』なり。　仇浪の成るや　氏
遙かに師に呈して斧正を乞ふ　師一閲驚て云く　彼が詩想の進
境何ぞ爾く急なるや　直ちに筆を加へて添削最も意を致す　而
して　仇浪の前半世に出る日　涼葉子の訃は　師の許に到る、
嗚呼　仇浪の一篇は　實に此の如き　慘澹悲愴の歴史を以て生
れたるなり。卷末には　同門の秋聲氏が　滿腔の同情を寄せた
る跋文あり　又　風葉氏の『院長』　春葉氏の『白堊』　鏡花氏の
『月下園』　いづれも亡友の遺稿を飾るが爲めに　各得意の筆
を着けたり、　殊に主眼なる仇浪の一篇は然く紅葉山人の青朱
を施したるものなれば　着想の奇警　文章の老熟　驚くべきも
のあり　今や文祿堂　此書を梓行するに方り　從來の小說刊行
には殆ど　其類を見ざる程の美裝を凝らし　用紙印刷共に精美
を極めたるは　亦文界の一美事と云ふべし　云々

（中央新聞評）

生死論

死は憎むべき者なる乎。

若し生を以て愛すべく、戀ふべき者なりとせば、死は良に憎み且厭ふべき者なるや明也。

然れども生や果して愛すべき者なる乎。

牛門の秀才田中涼葉氏　病で師紅葉山人の家を辭し　郷里金澤に歸つて病蓐尙筆硯を擲たず　喀血紙を染むるもの三度にして　初めて脫稿したるは　即『仇浪』なり。　仇浪の成るや　氏遙かに師に呈して斧正を乞ふ　師一閲驚て云く　彼が詩想の進境何ぞ爾く急なるや　直ちに筆を加へて添削最も意を致す　而して　仇浪の前半世に出る日　涼葉子の訃は　師の許に到る、嗚呼　仇浪の一篇は　實に此の如き　慘澹悲愴の歷史を以て生れたるなり。卷末には　同門の秋聲氏が　滿腔の同情を寄せたる跋文あり　又　風葉氏の『院長』　春葉氏の『白菫』鏡花氏の『月下園』　いづれも亡友の遺稿を飾るが爲めに　各得意の筆を着けたり、　殊に主眼なる仇浪の一篇は然く紅葉山人の青朱を施したるものなれば　着想の奇警　文章の老熟　驚くべきものあり　今や文祿堂　此書を梓行するに方り　從來の小說刊行には殆ど　其類を見ざる程の美裝を凝らし　用紙印刷共に精美を極めたるは　亦文界の一美事と云ふべし　云々

（中央新聞評）

生死論

死は憎むべき者なる乎。

若し生を以て愛すべく、　戀ふべき者なりとせば、　死

予は今不治の疾に嬰りて死は面前に來横れり。而も未だ全く生と絶縁せる者にあらず、方に思ふ、双手に生死を把りて立つ者に似たり。是に於て死なる問題を思ふや切也。

予を以て之を見れば、死は決して憎むべきにあらざる也。死は其の已に一の憎むべき者を有せざる也。唯人の生を愛するが故に、其の愛する者を奪去るといふを以て之を憎むに過きず、故に若し生の必しも愛するに足らざるを知らば、死の決して憎むべきにあらざるを知らむ。

此故に死の憎むべからざるを説かんとせば、先づ生の愛すべきものならざるを道はざるべからず。

抑も生を樂しと云ふは、生の皮相のみ。人の此世に生るゝや、生れ得て既に樂しき者なるにあらず。生

の樂きを得んと欲せば、之を樂むの道を講ぜざるべからず。則ち生存競爭の場に立ちて、優者の地を得んことを勉めざるべからず。入つては衣食に窮し出でゝは權利の屈するあるのみにして、彼の輿に駕する者が爲に力に用るのみの生活は、決して生の樂むべきにあらざる也。

人既に此世に出づ。悲むといへども及ばず、愁ふると雖も及ばず、然らば寧ろ進んで之を樂むに如かざる也。是先人の道を設け、教を垂れて其の樂むべきを誨へ、人亦其の誨に慣れて、竟に生を以て直に樂むべき者と爲して曉らざる也。然れども退いて考ふるに人既に生く。生くべきの務無からずや。人は一日も食無かる可からず、又衣無かる可からず。世と處するや、禮無かる可からず、又力無かる可からず。

若し一も意を用ゐ、思を勞する所無くして生活するを得ば、生或は樂しがるべし。然れども人の世は如此く無爲にして化する者にあらざる也。

設へば死の避くべからざる如く、生も亦避べからざる者也。吾人曾て生を欲すること無くして生れたり。既に形を此土に賦せらるゝや、又如何ともする能はず、是人たる者の第一の遭遇也。

夫遭遇免るべからざらは、之に處して其の善きを擇ばんとするは人の常情也。之を苦むと、之を憂ふると、之を樂むと一に處するの道如何に在りとせば、誰か之を樂まんとせざる者あらんや。

故に生の樂しと爲るは、生の樂むべきものあるにあらずして、人の之を樂むに因れり。生は始より樂むべき者あるにあらざる也。人爲的に强て之を樂むに

外ならず。

何を以て之を謂ふや。

人生れて七歳にして學に就く、爾來長ずるに從ひて其の心を勞し、身を役して家を成するに迨るが間、嘗て一日も苦まずといふ事あらず。是畢竟何の爲ぞ。要するに其生を樂くせんが爲の勤勞のみ。

人若し一日の勤勞を廢せんか、彼は一日の安樂を失

ふ也。其の安樂を得んが爲に勤勞するのみ。箇の勤勞無くして安樂常に來るとせば、又人生の如く爾く樂むべき者あらざらん、然れども吾人は此世に於て、此の勤勞を以て安樂を買ふに過ぎず、是に於て知りぬ。人生なる者は其の已に樂むべき者あるにあらずして、人の强て其の遭遇を良きに移して、之を樂まんとする者なるを。

飜て思ふに、死なるものは生を終るの道也。吾人既に生を得るの避くべからざる如く、又死の來るを避くべからず、之に因て人は其穴に還ると謂ふべし。既に此世に在りて或は功名を負ひ、或は事業を成し、或は富貴を得、或は權勢を擅にせる者は、其の全盛期の卒に短縮せらるゝに遇ひて、豈一片眷々の思なからむや。或は他の見て何等の思出もあるまじき、

貧窮賤卑の人と雖も、其分に應じて箇々貪着する所有り、妻子の愛、眷屬の愛、朋友の愛、亦之が縲と成りて益生の久しきを樂ましむ。誰か有りて笑を含みて死に就く者有らん。

然れど是思はざる者の甚しき也。

吾人始に既に生く。故に生きてあるべきの務を爲せりと雖も、要するに樂まんが爲に生くるにあらずし

て、生くるが爲に樂める也。生の終るを待つが爲に、假に其間を樂める者ならずや。生既に盡きて死來る、宜しく從容として迎ふべし。生の樂しきが如きは、生を得たるに就て之を處する一の方便なるのみ、其生終らんとせば、潔く之に就いて可也。死は決して此生の樂を奪はんが爲に來たれるにあらざる也。死は始より生者の樂と苦とを知らず、唯生の終を告

るが爲に來れるをや、吾人何ぞ之を憎むことを得む。之を憎むは死の何者たるを知らざる故のみ。死の何物たるを知らざる、則ち又其生の何物たるを辭せざるのみ。智者何ぞ如此くならん。

夫生と死とは天地の同胞たり。生の心必しも溫ならず、死の手何ぞ必しも冷ならん。生の容たるや花の

如く美也。死の狀たるや雲の如く幽也。

生は晨禽の囀る如く、死は晩鐘の度るが如きもの乎。

彼等は一腹同胞にして、而も親密なる朋友也。彼等は常に臂を把りて遊び。膈を聯ねて語れり。一は顯界に住み、他は幽界を司ると雖も、其魂は同じく接み、同じく寢ぬる者也。

生は幽界に入りて生るゝ者を作り、死は顯界に來りて終る者を出す。幽顯界を異にすと云ふと雖も、生と死との手を下さるゝ處に於て一也。

死の來るや人の樂を奪ふが爲にあらずして、其勞を息めしめんが爲也。一たび此理を知らば死は決して憎むべきにあらざるや明也。

死は招けども來る者にあらず、時到れば避くれども辭すべきにあらず、其の進退既に如此く公明にして、

且正大なるを吾人何ぞ之を憎むべけん。

長生必しも多福ならず、夭折必しも薄幸ならず、彼等の去來は固吾人の關する所にあらずして、天の命ずる所なるのみ。既に生きてさばかり勤勞を要する世に在りて、爾く自ら樂むを知れる吾人よ、何ぞ一の勤勞無き幽界に入るの安きを思ひ、恝然として其の導くに任せざる。

方便の「樂」に惑ひ、幻影に執し其本を忘れ、末に拘りて却りて死を憎まんとする又愚ならずや。

予は此死に導れて後、天國に登り、極樂に行かんことを企圖せず、寂然として眠れば足れりと爲す者也。

吾が死は終れる故に、死の來り迎ふるにあらずや。

吾死の了れるを如何にせん。

三十六年七月九日

故尾崎紅葉先生著

遺墨

全一冊　定價五十錢（郵税四錢）

故紅葉山人

武内桂舟先生畫
藤松洲先生畫

●紅葉山人の遺墨（百人一首）が書道に堪能なりしことは、世人の熟知せるところなるが、一昨年の春、書伯武内桂舟の家にて、歌留多遊の會屢々催ほされ、席上取らん取られまじと、札を引奪ふこと烈しければ、一組の骨牌、ものゝ三日と全からず、裂捨てられるが常なるを、山人が見て、是れ無益の費用なりとて、鳥の子の厚紙に、百人一首の下の句を認めて贈りければ、同門の人々其賜を謝し、丈夫に畏打して、此れならば常陸と梅とが奪ひ合ふとも、豈取破れる虞なしとて、本年の春を

故尾崎紅葉先生著　武内桂舟先生畫
齋藤松洲先生畫

小說　芝（しば）肴（ざかな）

特價三十錢（郵稅四錢）

一篇八章、これを小說にしては、令夫人、胸算用、黑つむぎ、並に金盃あり。これを小話にしては倭字、電話、藪なる哉、及び藥禮、あり、山人の作、人の見ざるなく、讀まざるものあることなし、如上八章の內、世評既に例の如く嘖々たるものあり、然も義に因て筆を未開の地に入れたるもの、人の知らざるが少なからず、如斯は異とすべし、

故尾崎紅葉先生著　武内桂舟先生畫　齋藤松洲先生畫

小說　芝（しば）肴（ざかな）

特價三十錢（郵稅四錢）

一篇八章、これを小說にしては、令夫人、胸算用、黑つむぎ、並に金盃あり。これを小話にしては倭字、電話、藪なる哉、及び藥禮、あり、山人の作、人の見ざるなく、讀まざるものあることなし、如上八章の內、世評既に例の如く嘖々たるものあり、然も義に因て筆を未開の地に入れたるもの、人の知らざるが少なからず、如斯は異とすべし、一たび手にするものは新に寶玉を取て藏するの快なくんばあらず、表裝また優美淸雅、繪畫色彩これに合ふ、之を書架に置く時、其の文、其の書、共に比すべきものなからん也。

（新小說評）

發賣元　東京市日本橋區東中通り　文祿堂書店

樂みと待ちけるに、小夜の時雨紅葉を撲つこと急にして、山人は病の爲に身疲りしかば、桂舟一門の慨み殊に深く、形見にとては殘さゞりしを、徒らに昔を偲ぶ種となりしこそ口惜けれと、書伯は之を屏風に仕立てゝ永く珍藏するを、巖谷小波、石橋思案が見て山人が筆致の餘韻を後世に貽すもの之に如くなしとて、書肆文祿堂と相談の上之を寫眞木版とし、原形の大ささを堅牢の日本紙に印刷して出版せり、有繋に晩年成熟の筆の蹟、雄勁清健にして極めて見事なり。

（二六、新報、評）

觀月

○十月五日

午前六時目覺む（直にモルヒネ〇、〇一三を用ゆ）。連日モルヒネ服用の爲に、食欲減退せりと雖、空腹を覺

が書道に堪能なりしことは、世人の熟知せるところなるが、一昨年の春、書伯武内桂舟の家にて、歌留多遊の會屢々催ほされ、席上取らん取られまじと、札を引奪ふこと烈しければ、一組の骨牌、ものゝ三日と全からず、裂捨てられるが常なるを、山人が見て、是れ無益の費用なりとて、鳥の子の厚紙に、百人一首の下の句を認めて贈りければ、同門の人々其賜を謝し、丈夫に畏打して、此れならば常陸と梅とが奪ひ合ふとも、豈敢破れる虞なしとて、本年の春を樂みと待ちけるに、小夜の時雨紅葉を撲つこと急にして、山人は病の爲に身歿りしかば、桂舟一門の慨み殊に深く、形見にとては殘さゞりしを、徒らに昔を偲ぶ種となりしこそ口惜けれと、書伯は之を屏風に仕立てゝ永く珍藏するを、巖谷小波、石橋思案が見て山人が筆致の餘韻を後世に貽すもの之に如くなしとて、書肆文祿堂と相談の上之を寫眞木版とし、原形の大さを堅牢の日本紙に印刷して出版せり、有繋に晩年成熟の筆の蹟、雄勁清健にして極めて見事なり。

觀月

○十月五日

午前六時目覺む（直にモルヒネ〇、〇一三を用ゆ）。連日モルヒネ服用の爲に、食欲減退せりと雖、空腹を覺

巖谷一六先生題字

紅葉遺墨 百人一首

全一冊　定價五十錢（郵税四錢）

故紅葉山人

●紅葉山人の遺墨（百人一首）が書道に堪能なりしことは、世人の熟知せるところなるが、一昨年の春、壽伯武内桂舟の家にて、歌留多遊の會屢々催ほされ、席上取らんと取られまじと、札を引奪ふこと烈しければ、一組の骨牌、もの丶三日と全からず、裂捨てられるが常なるを、山人が見て、是れ無益の費用なりとて、鳥の子の厚紙に、百人一首の下の句を認めて贈りければ、同門の人々其賜を謝し、丈夫に裏打して、此れならば常陸と梅とが奪ひ合ふとも、豈取破れる虞なしとて、本年の春を樂みと待ちけるに、小夜の時雨紅葉を撲つこと急にして、山人は病の爲に身歿りしかば、桂舟一門の慽み殊に深く、形見にとては殘さゞりしを、徒らに昔を偲ぶ種となりしこそ口惜けれと、壽伯は之を屏風に仕立て丶永く珍藏するを、巖谷小波、石橋思案が見て山人が筆致の餘韻を後世に貽すもの之に如くなしとて、書肆文祿堂と相談の上之を寫眞木版とし、原形の大さを堅牢の日本紙に印刷して出版せり、有繋に晩年成熟の筆の蹟、雄勁清健にして極めて見事なり。

（二六新報評）

えて、ネエル　ストフ二茶匙を服す。

一睡の後、八時覺眠。牛乳五勺、半熟卵黄三個を啜る。

孝瘡漸く痛む。

神氣快なるにはあらねど、天氣晴朗の爲に、良寛なるを覺えて頗る慰む。

朝餐以後四時間半、入りて枕に就く。

午前、安川氏、催眠劑抱水格魯兒の件に就き來訪。

午後二時、ヘモクロビン一個を服す。

要屋より栗一升を贈り來る。

松洲氏より尾花、千鳥刈萱○北海道産大林檎二個を贈り來る。

樺島よりクロケットを贈り來る。

買物　一升桝○金口土耳古莨百本○獨逸製白葡萄酒

一罐。

午後一時、祖父、熊崎氏還暦の宴に招かれて、濱町岡田に赴く。

同四時、松濤氏來訪○翠溪氏歸坂、國府津より葉書○秋聲より觀月逛斷り狀來る。

晩頃、人を遣して松洲、松濤二氏に畫を需む。狸豆(松洲)枝豆に蟲(松濤)

朝より疼痛息まざるを以て、始めて懐爐を用ゆ。

同六時、點燈、モルヒネ服用の爲に咽喉燥き、加ふるに、昨日來の腸の膨滿減ぜずして、今猶疼痛に耐へず。

上燈後、滋養灌腸(鷄卵一個、ビイフゼリイ半匙)を行ふて、少時假床せし間に、觀月の人悉く集り居たり。

樓に上りて八時開莚。月色明に、風無く。氣靜に、

昨の如く寒冷ならず。遇難さの艮夜なり。會する者、安川氏、風葉(手製の精進揚一重持參)吟葉、鏡花、斜汀、春鴻、水葉、春石、麥人(九時半)

同八時半、胃痛息まざる故に、またヘイロンを服す。

斯日睡起より情騰として氣力薄く、人々集りて後、快談爲さんとするに、困憊と疼痛と交も迫めて、意の如く爲る能はず。運座の題を課して後、約一時間

(十時半より十一時半)眠るを得、爲に小快を得たり。

題　藥堀○露○袷○鰍○月草○椎○蟲○月

句を得る　章

睡起の後、艮快なるを覺えて、病中觀月の句を書し、新に疇村氏刻する所の、白檀印を用ゆ。

病中不把盃。我をして月前獨り
憂ひしむる勿れ

莫留非涅の量増せ月の今宵也

鰹皮づくりの魚軒三片を口にす。十二時半、熊本の人贈る所の順氣和中湯を煎じて服用す。胸忽ち爽に、腹中春の如し。

此より後、頗る精神の爽快を覺え、談笑常に復す、即ち蓐を出でゝ衆と語る。

午前三時半、チョコレエト入の牛乳一合を用ゆ。

同四時半、終會。斜汀歸る。

同五時、戸を啓く、天色漸く白し。

同五時半、散會。

明治三十七年二月廿七日印刷
明治三十七年三月一日發行

【帝國文庫】

定價五十錢

不許複製

編纂者　東京市麹町區一番町十三番地　巖谷季雄

發行者　東京市日本橋區博正町一番地　堀野與七

發兌元　東京市日本橋區博正町一番地　文祿堂書店　電話本局八十八番

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

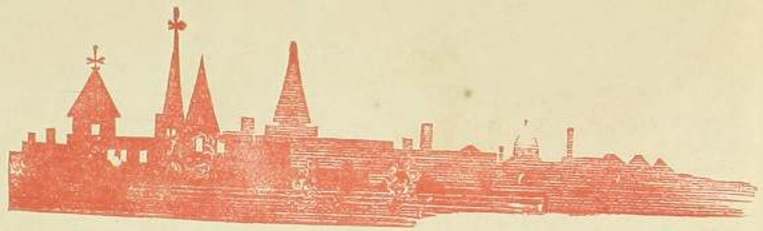
文祿堂出版及發賣書目

東京書肆

文祿堂
花田屋　堀野與七

日本橋區東中通博ゼ町一番地

電話本局八十八番



STRANGERS IN STRANGE LANDS.

はらの屋春雄君著

洋行奇談 赤毛布

田舍漢の江戸見物を人綽名して赤毛布といふ、本書は當代の貴顯紳士が不知案内の海外に航して彌次、喜多然たる滑稽を演ぜし奇談を蒐集せしものにして、政治家あり軍人あり醫師あり文士あり豪農商あり厭人あり一讀萬笑魂ひ天外に飛びたまふべし。（定價二十錢）（郵稅四錢）

ドクトルユーモア氏譯

英文赤毛布

世評に曰く、こは皆て好評を博したる洋行奇談赤毛布の英譯にして行文毫も晦澁の迹なく洗鍊を極めたり本書の如きは蓋し英譯して最も趣味あるものなるべく内外人共に愛讀する所なるべし。（定價三十錢）（仝上）

長田秋濤君著

新赤毛布

當世著名のハイカラ紳士諸公が、洋行中に於る珍事奇聞を集めたる、新篇不思議の妙書にして、前の赤毛布に引續きたる滑稽談は、なほ數十種を列れ附錄として揚げたる口演數種は奇々怪々なる文字を以て充たしぬ。（定價廿五錢）（仝上）

長田秋濤君著

露西亞 朝鮮 支那 遠征奇談 新々赤毛布

愉絶快絶の秘著也。（定價四十錢）（郵稅六錢）

本書は、露西亞、朝鮮、支那、及び南洋等に於ける珍事奇聞を蒐輯せる、

浪路春香君著

舶來人間 赤毛布

本書は、泰西諸國より本邦（渡來せる外客の滑稽談を集めたる、是亦不思議の珍品たり。（近刊）

發兌元 東京市日本橋區東中通 文祿堂書店

和英對照 日本歷史 **さくらとばら** 定價五錢 郵稅四錢

中外英字新聞評して曰く、本書は國史中最も著明なる出來事を選に高等商業學校、錦城學校等に於て英語を教えたる經驗に富み、殊に英文を最も得意とする永井尙行氏の英譯あたるものなれば、外國人かして大和魂の香ばしきを仰がしむるに於て其功鮮なからざるべし。云々

東京日本橋東中通 文祿堂書店 賣捌全國書林

文學士 大町桂月君著

三版 社會訓

定價四十錢（郵稅六錢）

當代の才筆大町文學士が●文藝●教育●宗教●道德●風俗●習慣等に關し大なる訓戒を與へられたる吾人必讀の良書也。

六版 筆のまつぐ

定價四十錢（郵稅八錢）

同文學士の、●美文●論文●紀行●史傳●隨筆●韻文等を集めたる、明治文壇の珍什也。

墨岩周六君序 湯朝觀明君著

七版 人間論

定價卅三錢（郵稅六錢）

百の哲學書を讀んより千の科學書を看んよりは一大抱負を以て世に出づるや、稱讃に罵倒に批評の矢を放たれたる、空前絶後の奇文を見よ。

東京日本橋區東中通 文祿堂

大澤天仙君著
鏑木清方君畫

定價四十錢（郵稅六錢）

小說 催眠術

目下大流行の催眠術は能く病疾を醫し惡習を破り、性質を正しうせしむる効力あれども、亦人の精神を奪ひ、思想を攪亂せしむる大魔力あり。本書は美人・兒賊・惡紳士・銀行員・書生・法官等を配合し、讀者をして妙と呼び怪と叫ばしめつゝある間に容易に此むる術の活用を悟らしむる斯術の奇拔の學理的小說也

東京市日本橋區東中通 文祿堂書店
日本五大新發行元 電話本局八十八番

大增補

文學博士三宅雪嶺先生序
虛心窟主人著 定價廿八錢（郵稅六錢）

我觀婦人

本書は「酒前酒後」「鬼言魔語」なる奇文を載せて日本新聞紙上の花と稱へられたる虛心窟主人が○婦人の社會的勢力○婦人美は人工美也○人工美は天然に背く○男女の關係○人間色慾の發動には一定の期節あるべき所以○婦人の社會的罪惡○戀愛の眞義○婦人處世の革新等を○社會學○生物學○生理學より推究せる

前賢未發の大議論也

再版中

懷谷小波君序
山岸荷葉君著
鏑木清方君畫
鳥居清忠君畫
大村令邦君畫

くれぐれ御覽を願ふ

古今無類の美本

三版出來

定價三十五錢（ゆうびん共）

世の都に色深く、五人揃ひて生粹の神田育。酒き霧間に若葉を摘むが如き風情はお京よ、紅梅へなまめくはお大にすぎなくば、お瀬は寒牡丹のおこれるにさも似たり、水仙の憐れなるがお達ならば、さて福壽草のあどなきはお樣の上の、いづれをいづれ、香をきそふ、美くしの娘 がた。

軍國の大活書

●高橋五郎先生新著

新刊 戰爭哲學

菊大判全一冊
定價金四拾錢
郵稅六錢

戰爭や小は民人の禍福、大は一國の存亡に關す、暗中飛躍程危險なるは無し、幸に世戰爭哲學なる者あり、著者即ち國家社會上より宗教道德上より、人道上、美術上、哲學上軍事上より推究し、東西古今の哲論を會萃折衷し以て此天下の最大事に千古の大鐵案を下せり、朝野官民の必讀は勿論出て戰ふ者、居て守る者共に戰爭の哲理を常に胸裏に藏するを要す、立論の新警目を醒すに足る也、

發兌元

東京日本橋區箔屋町　前川文榮閣

日本

五大噺

●日本五大噺は、
●日本一の小說家
曲亭馬琴翁の名作を
京の蔦兵衛大人が、
お伽噺に直されて、
芳景先生の密語を加へた
奇麗な〳〵、面白い〳〵
本であります。

東京市日本橋區槇正町
文祿堂書店

全一冊　定價拾八錢（郵稅二錢）

新婚

滿天下の才人淑女が待ちに待ちたまへる　江見水蔭君　田山花袋君　其他諸名家の筆に成る　小說『新婚』は　いよ〳〵今般　美裝を凝らして　江湖に見ゆる事とはなれり

依て　新婚の若夫婦は勿論　伉儷の約をむすびて　人生の最大幸福を　夢みつゝあるか　或ひは　百花をふらぶ　胡蝶の如き　あほれ面白の　御方樣は　くれんぐも　讀ませたまへ　とゝめてたく

定價金三十八錢　郵稅六錢

東京市日本橋東中通り
文祿堂書店

人生宗教哲學の三大鐵案

高橋五郎先生新著書目

六版 **最新一元哲學** 定價五拾錢 郵稅八錢

本書は著者が該博の智識と深邃の考慮とを以て一元哲學を根底より歴史的に哲學的に社會的に叙論し附錄に黒岩君著『天人論』の一元主義を無遠慮に評隲して餘蘊なし

五版 **世界三聖論** 定價四拾錢 郵稅六錢

著者が富贍の智識と犀利の筆鋒を以て縱横に論評せらる壯快の文字深邃の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむ

十版 **人生觀** 定價五拾錢 郵稅八錢

本書は古今幾多の人生觀を掲擧し遂に健全無病なる大人生觀を打出し來れるものなれば人間たる本分を知らんと欲する者は一讀せずんば有る可らず

哲學博士リー君原著 高橋五郎君譯

七版 **人生哲學** 定價五拾錢 郵稅八錢

本書は超群絶倫の人生哲學にして學問と宗教此書に於て始めて孝悲の和階に達せりと云ふべし實に萬人必讀

發兌元 東京日本橋區濱屋町 前川文榮閣

屈山 小室重弘先生新著 第四版

實驗雄辯學

菊大判全一冊 定價參拾五錢 郵稅六錢

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辯舌は竟に社會競爭の上に於て、劣敗者たるを免かれず、本書は著者が多年の實驗に基き、談論の秘訣、雄辯の妙用を講述せられたる者なれば、唯に雄辯術のみならず、亦文學にも創見する所少からず、故に實業家、教育家、宗教家、政治家、文學家、法律家、議論家、學生諸君の必讀すべきは勿論苟も文明の國民たる者は一本を座右に備へ、自己の運命を向上發展せられよ、

發兌元 東京日本橋區濱屋町 前川文榮閣

讀賣新聞記者 安藤直方君 多田錠太郎君 合著

印刷中

實業の栄

全一冊 定價四十錢 郵稅六錢

本書は曩に讀賣新聞紙上に於て『渡世のいろ〳〵』と題し、現今の實業數十種を選び、而して其資本、營業品の産地、仕込、賣先、取引の工合、時期、利益等は元より、商人として必ず服膺すべき事項を精密に連載して、大いに江湖の喝采を博したるものへ、更に訂正增補したる、實業界無二の羅針盤にして、大は巨萬の資本を有するものより、小は僅少の薄資者をして、心安く世を送らしむる、叮嚀懇切の良著にして加ふるに清水晴風翁の考古書を數多挿入して、昔時の營業振りを示したれば、眞に其趣味や掬すべく、故に商業に志あるの士は言うを俟たず、學者としても必讀すべき近來無比の好文字也。

卷中に掲載せる營業種類は左の如し

糸商　鹽商　汐商　紅商　綿商　質商　米穀商　呉服商
薪炭商　洋服商　時計商　砂糖商　書籍商　團扇商　葉種商　貿易商
材木商　古着商　鰹節商　銅鐵商　陶器商　筆墨商　煙草商　銃砲商
青物商　乾物商　荒物商　魚商　刷毛商　靴商　漆器商　菓子商
運漕業　貸船業　氷水商　牛肉商　下駄商　肥料商　茶商　酒商
漬物商　海産物商　雛人形商　繪草紙商　和洋小間物商　釣道具商　米穀仲買業　株式仲買業　和洋紙商　古道具商　玩弄物商　和洋料理店
金魚賣　植木賣　燒鳥商　剪花商　廣告取次業　新聞雜誌商　花見茶屋　風鈴賣
虫　文字燒　新粉細工　稗蒔賣　酸漿賣　苗賣

法學博士　田口卯吉先生序
經濟雜誌記者　柳澤泰爾先生著

再版

無冠帝王
南阿奇傑

セシルローズ
附錄　南阿戰史

彼の死は確かに全世界を震動せり、偉人乎英傑乎將云ふが如く人道の敵なる乎歎美と呪詛とは彼の關する處にあらず五十年終始一貫の定見を抱持し帝國主義の建設と南阿統一の壯圖を畫して勇往邁進所信を遂行したる希世の快男子を縱横描寫して餘蘊なきものは即ち此書なり

實業之日本評　ローズは南阿の奇傑英國の偉人のみならず實に十九世紀に於ける世界の偉人なり、彼が帝國主義を持し專心南阿の開拓に從事しトランスバールをして英國の一殖民地と化せしめたる大事業は世人の既に知る所の如し此書は即ち偉人の經歷、政治及宗教觀より記述し尚著者のローズ論、南阿戰史を掲げたるものなり、ローズの人となり經歷を見るに付て殆んど遺憾なしと云ふべし

大阪朝日新聞評　彼を罵るものは大なる野犬といふ彼を稱するものは南阿の大恩人なりといふ彼一朝死するに及びては敵も味方も不世出の英傑として哀惜す　此の如きは南亞米利加に所謂帝國主義を實現せしめし十九世紀末葉の人豪セシル、ローズなり　此書其人物傳記を叙し小冊子たれども一讀彼を盡すに足る

毎日新聞評　是れ近世の一奇傑セシルローズの傳記にして又南阿問題の小歴史なり、文章簡潔流暢誦すべし

口繪△セシルローズ肖像△侵入事件張本者肖像△ケープタウン全景寫眞版△袖珍美本△一部十六錢郵稅二錢

虛心窟主人著

醉醒禪

近刊

虛心窟主人は能く嘲り能く罵る、嘗て日本新聞紙上酒前茶後　鬼言魔語に於て嘲罵諷誡を極め、觀察行文の奇警既に定評あり、罵る者非歟、嘲らるゝ者是歟、此書を讀て首肯する者あらば其人必ずや君子也。

坪内逍遙君序　森鷗外君序　伊原青々園君著　落合芳幾君　鏑木清方君畫

劇壇一之大珍書

市川團十郎

美術的製本全一冊

定價九拾錢（郵稅不要）

●題して市川團十郎と云ふと雖其說く所は彼を中心として劇の全般に亘る所謂團十郎史にして又實に近世の劇史たり。

●勸進帳●兒雷也●爲朝●鳶の金五郎●助六●關羽●地震加藤●河內山●毛剃●朝比奈●齊藤●內藏之助●柴田勝家●千々輪五郎左衛門●水戶黃門●敷革の重忠●西鄕隆盛●犬山道節●青山●鐵山●齋藤實盛●早野勘平●大星由良之助●鹽谷判官●高野師直●寺岡平右衛門●大炊定九郎●矢部●梅王●鶴坂伴內●しばらく●關兵衛●赤松滿祐●不破伴左衛門●眞田幸村●宮瀨內局●菅丞相●三保藏●戶田大炊●城五郎●荒木政右衛門●荏柄の平太●酒井左衛門●山姥●桶石齋●藏卿松王●武部源藏●忠信●根五郎●頼兼●政岡●金看板甚九郎●遠藤武者盛遠●不動尊●文覺●草摺引の五郎●吃の又平●矢の根五郎●北條高時●靜（法樂舞）●船頭●保名●伊勢の三郎●燒香場の秀吉●不望月輝●釣狐●大森彥七●加藤清正●女楠●枕獅子●大久保彥左衛門●日蓮上人●博士達●平景清●狩場八重垣姫●岩藤●門●渡邊華山●九紋龍史進●鶯娘●辨天●靜●船頭●保名●伊勢の三郎●燒香場の秀吉●不望月輝●釣狐●大森彥七●加藤清正●女楠●枕獅子●大久保彥左衛門●日蓮上人●博士達●平景清●曉雨●板額●岩藤●門●草●大●藤●源三位頼政

等に拐して入神絕妙の技を縱にせる、精巧なる寫眞版を挿入せり。乞ふ一本を求めて故名優の俤を偲ばせたまへ

豐臣秀吉公
德川家康公眞蹟
吻鹿庵主人著

嗚呼古英雄

全壹冊

定價廿五錢

（郵稅各四錢）

織田信長公肖像
毛利輝元公眞蹟　挿入

續

嗚呼古英雄

吻鹿庵主人著

全壹冊

定價三十錢

古來の英雄豪傑數百人を捉へ來つて、縱橫無盡に品評せる、

壯絕快絕の珍書也。

春風秋雨三百歲。歷史は星霜を殘して、彼等今や無し。半宵、落葉を踏んで、卒都婆影淡きほとり、私かに古英雄が夢の跡を尋ぬれば、松風颯々として、蘿月徒らに黑きのみ。噫

●先輩黑岩涙香君の序文著者の人物を知らしめ●

文界に異彩を放てる銀月君、炬の如き批評眼に燃ゆるが如き熱情を注ぎ。日本史の裏面を貫通せる活ける血の潮流に筆を染めて、獨創の人情觀的日本史を成す。之を一面より見る時は、新式なる三千年間の人物評也。紅焰櫻花を撲ち醵酒玉盞に滴る、眞に是れ千古の痛快文字、現下の興奮的國民の讀物として此書の右に出るものある無し。

伊藤銀月君 新著

人情觀的日本史

近刊

●友人青柳有美君の跋文本書の價値を知らしむ●

廣告

新刊

海軍省通譯官 高須五湖先生著

速成日露會話獨習

（三月上旬發行）

今や東洋の風雲益々急にして事端頗る滋擾なり、而して日露の關係は最も密接に最も重大なり、今にして露語の研究に志さずんば他日意外の不利不便あるべし、本書は嚮きに露和字書を著はし電名を天下に轟かされたる我國第一流の露語達者たる高須五湖先生が最も切實に露國語の文法を分解適用しつゝ日用必須の會話例則を網羅して初學者の便にせらる、學生軍人は勿論、時局に意を注ぐものは座右に一本を備へて露語研究の用に供せらるべし。

總クロース金字入
ポッケット形全一冊
定價金五拾錢
（郵稅六錢）

發兌元 東京日本橋區箔屋町 前川文榮閣

獨乙文豪 ゲーテ原著
米國文豪 テーロル韻譯

高橋五郎註疏 最新刊

英文フワウスト

美術的製本
定價四拾五錢
郵稅六錢

十九世紀最大天才の最大傑作とはフワウストの通稱也今其英譯の粹を選び必要なる註疏を附して初學者の便にす。以て學校の教科書とす可く、以て英學者の獨研究に供せらる可し。本書出でゝフワウスト始めて我國に紹介さると謂ふ可し。

獨乙文豪 ゲーテ原著
大日本 高橋五郎譯

近刊

和譯フワウスト

定價
郵稅 未定

誤譯不精密は翻譯書の常たる今日此書は翻譯の模範を以て自ら任ず、英獨兩語に精通せらるゝ高橋五郎先生責任を以て斯業に當らるれば、原意紙上に躍如として英獨兩フワウスト研究家に指針嚮導たらんこと贅辯を要せず。

發兌元 東京市日本橋區 前川文榮閣